

台湾魅力発信 vol.7

鄭文燦・桃園市長インタビュー

慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員 寺山学
(元日本台湾交流協会台北事務所総務室長)

今回は、台湾における有力なポスト蔡英文時代のリーダーの一人として目される鄭文燦・桃園市長から、桃園市の魅力、桃園と日本との関係や将来の展望などについてお話を伺いました。

- ・インタビュー実施日 2021年9月30日
- ・インタビュー実施場所 桃園市政府

＜鄭文燦市長略歴＞

1967年、桃園市八徳区生まれ。国立台湾大学社会学部卒、国立台湾大学国家発展研究所修士（学生時代に国立台湾大学学生会副会長、野百合学生運動リーダーなどを担う）。

1998年、桃園県議会議員初当選。

2006年、行政院新聞局長就任。

2009年、桃園県長選挙に立候補、国民党候補に約5万票の差で惜敗。伝統的に国民党が優勢な桃園県において、僅か2か月の準備期間での善戦に「58日の奇跡」と称される。

2014年、直轄市昇格後の桃園市長選挙で現職に勝利し、桃園市長に就任。

2018年、韓国瑜ブームによる逆風の中、15万票もの大差をつけ再任。

主な著書に、『鄭文燦模式（鄭文燦モデル）』（天下文化、2018年）。



新型コロナウイルス感染症と日台関係

—鄭市長の下で、日本と桃園との関係は緊密化し続けています。新型コロナの対応においても、鄭市長は市独自に日本への関連物資の支援を実施されました。

鄭市長 台湾と日本は友人です。我々には歴史、文化、経済などの面で深い繋がりがあるだけでなく、民主主義、自由や人権といった共通の価値観で結ばれています。私が日本への支援を決

めたのは「まさかの時の友こそ真の友」という言葉の通り、台湾と日本がこれまで友人として相互に支え合ってきた歴史を踏まえてのことです。実際、1999年に台湾で中部大震災（921地震）が発生した際の最大の支援国は日本であり、同様に2011年に日本が東日本大震災に直面した際、台湾の支援は各国中最大でした。百年に一度とも言われた大震災の中で、台日双方は互いに躊躇することなく、最も早いタイミングで最大限の支援を行ったのです。東日本大震災が発生した際、私は民進黨桃園県党部主任委員でした



ワクチン支援に感謝を表明する鄭市長
(鄭市長 FB より)



友好都市成田市の記者会見
桃園の支援に感謝を表明



日本への支援を表明した鄭市長
(鄭市長 Twitter より)

が、翌週には党本部で司会を務め、1分間の黙祷を行いました。その時はとても悲しくて、日本を応援できたらと思い、県内各地で義捐金の呼びかけを始めましたが、行き着く先で直ぐに募金箱が一杯になったことを鮮明に覚えています。日本が災難に遭った時、殆どの台湾人が気にかけて、援助の手を差し伸べる、これこそが台日の

間に存在する特別な感情なのだと思います。

昨年、新型コロナが世界中に広まった直後から、台湾は政府による支援の下、医療用マスクや防護服などの重要な感染防止物資の生産を拡大するため、政府や関連企業によって構成される「国家チーム」を立ち上げました。桃園市には台湾最大の紡績クラスターが存在していることから、多くの桃園市企業が「国家チーム」に加わり、感染防止物資の生産拡大に尽力しました。その過程において、私は桃園市の企業が懸命になって生産した感染防止物資の一部を友人である日本にも届けたいと考え、桃園市が友好都市協定を結ぶ五都市、宮城県や仙台市など関係が深い日本の都市に対して、感染防止物資の支援を行いました。この際、新型コロナという困難に対しても、心を一つにして乗り越えることができるということを強調したくて、支援物資の箱に宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ 風ニモ負ケズ」という言葉を引用しました。感動したのは、皆さんが物資を受取った後、まだ感染防止対策に忙しく緊張状態であるにも関わらず、SNS等で感謝の意を伝えてくれたことでした。これがコロナ禍の新しい交流モデルにつながりました。

桃園市と日本を結ぶ都市外交

—鄭市長は市長就任以来、日本との都市外交を積極的に進めてこられました。

鄭市長 私が桃園市長に着任してまず驚いたことは、台湾最大の空港である桃園国際空港を市内



友好都市香川県はビデオレターで桃園を応援

に擁し、日本の各都市と深い関係にある桃園市が、日本との間で一つの友好都市協定も締結していなかったことです。私は、多くの桃園市民が、日本に関心を持ち、日本との交流を望んでいるにも関わらず、市政府がそれを推進しないのはおかしいと考え、市長に就任した直後に、日本との都市外交を積極的に進める方針を打ち出しました。その後、日本全国の各都市と積極的に交流を行い、現在までに千葉県、香川県、宮崎県、成田市、加賀市及び和歌山県湯浅町との間で協定を締結するに至りました。また、単に協定を締結するだけでなく、友好都市との間で青少年のホームステイ活動、自治体職員間の相互訪問、マラソン交流、芸術交流や物産展など様々な具体的協力を推進してきました。日本側との交流を通じて、私自身も日本の知見や経験を市政の参考にさせて頂きました。例えば、千葉県との交流を通じて、千葉県が「チーバくん」というマスコットキャラクターを用いてPR活動を行っていることを知り、早速、桃園市も「桃ちゃん・園くん」という独自のキャラクターを作り、市のPR活動に活用しました。現状、友好都市との間の相互訪問を通じた交流は難しい状況ですが、そうした中でも我々はネットを通じて頻繁に交流を行っており、桃園市と日本との間の都市外交は更に発展しています。先ほどお話しした通り、2020年の日本でのコロナ感染初期には、友好都市へ感染防止物

資を寄付することにしました。香川県や成田市などの友好都市はSNSで謝意を伝えてくれ、これがSNS交流を切り開きました。2021年1月末に起きた衛生福利部桃園病院の院内クラスターの際には、友好都市から手紙やSNSで桃園に続々とエールが送られ、その後千葉県や香川県、成田市とはSNSでのやりとりが常態化しています。台湾で感染が広がった際には、成田市の小泉一成市長が同市の新勝寺にお参りしてくれましたし、加賀市の宮元陸市長は職員の皆様と台湾語の歌を歌って励ましてくれました。面と向かっての交流が一番いい方法ではありますが、たとえコロナ禍にあっても、その気にさえなれば、お互いを思い関係を続けていくことはできる、困難のせいで音信が途絶えるということはありません。

日本人に訪問して欲しい桃園市の魅力

一鄭市長は桃園市の最大の魅力はどこにあると考えますか。また、日本からの観光客には、桃園市でどのような体験をして欲しいと考えますか。

鄭市長 私が考える桃園市の最大の魅力は、「多様性」です。桃園市には、山と海の豊かな自然が存在している他、エスニシティの面でも、台湾の異なるエスニシティ（ミンナン人、客家人、



チーバくんと交流する桃ちゃん・園くん
(Tao&Yuango FBより)



原住民タイヤル族が暮らす自然豊かな
「角板山」(桃園市復興区)



「桃園神社」設計者の子孫春田家義捐金贈呈式
(2018年5月18日桃園市桃園区)

外省人、原住民及び新住民) が共存しています。この多様なエスニシティの文化を反映するのが、桃園市の多彩でユニークな食文化です。桃園市内では、台湾伝統料理、客家料理、原住民料理或いは東南アジア料理など、異なるエスニシティの本場の味を同時に楽しむことができます。

私が日本人観光客に最も訪問して欲しい場所は、桃園神社です。桃園神社は、日本以外の海外に現存する最も保存状態の良い神社だと言われています。戦後、国民党政権の時代には、解体の方針が示されたこともありましたが、当時の台湾の知識人が知恵を絞り、「日本人が残した『唐式建築』だから残す価値がある」と政府を説得し、奇跡的に破壊から免れました。市長就任後、私はこの桃園神社を修繕するとともに、「忠烈祠」ではなく、その名称を「桃園忠烈祠・神社文化園区」に改めました。現在、桃園神社は日本と桃園を繋ぐ重要な架け橋の役割を担っています。例えば、2018年には桃園神社を設計した春田直信氏の子孫が桃園神社を訪れ、神社の修繕を支援して頂くなど、桃園神社を拠点とした交流の輪が広がりを見せています。

桃園神社以外では、大溪(大溪区)、角板山(復興区)、虎頭山(桃園区)、石門ダム(大溪区)、慈湖(大溪区)などの観光地をお勧めしたいです。特に大溪は、日本時代に発展した町で、多数の日本時代の建物が現存することから、訪問

した人の多くが「日本の街に迷い込んだような感じがする」と話すなど、独特な魅力を持っています。また、横浜八景島が桃園市で開業した水族館「Xpark」も日本の方にお勧めしたいです。日本企業が開業した水族館ですが、横浜八景島とは一味異なる、台湾独自の魅力や特色を感じ取ることができるはずです。

—鄭市長は日本時代の建物の修復にも大変ご尽力されてきました。

鄭市長 私が日本時代の建物の修復に力を入れたのは、戦後国民党政府が清朝以前の建物を修復する一方、日本時代の建物は放置してきた歴史が関係しています。日本が伝統的な日本建築のみならず、西洋建築の保存にも尽力しているのと同様に、台湾も台湾が歩んできた歴史を風化させないように、いずれの時代の建物も平等に保存すべきだと考えてきました。そのため、これまでに市内に点在する13箇所の日本時代の建物群の修復に取り組んできましたが、そのうち数の面で最も多いのが前述の大溪です。大溪では、これまでに武徳殿、相撲場、旧警察官宿舎、公会堂や穀物倉庫など多数の建物の修復を行ってきましたが、これによって街の雰囲気は一変しました。また、桃園区に所在する旧大廟口派出所も昨年修復が完成したばかりです。ここは



2017年桃園子供力士・マスコット相撲大会
は修復の完了した大溪相撲場で行われた
(2017年11月18日桃園市大溪区)

日本時代に派出所としての役割のみならず、保甲（注：清朝時代からの制度で、日本時代の警察の補助機関）が集う会議場の役割も担っていました。そのため、修復された同派出所は、日本時代の統治制度である保甲制度を理解する上での重要な史跡でもあります。さらに、桃園市では単に建物を修復するだけでなく、それぞれの建物と現代との繋がりを重視してきました。例えば、龍潭区の日本宿舍群は、修復後、実際にこの場所で暮らしたことがある「台湾文学の母」鍾肇政を記念する博物館として生まれ変わりました。また、大溪の武徳殿は、同地の主要産業の一つである木製家具などを展示するイベント会場として再活用されています。それぞれの建物が持つ歴史的な意義や背景を踏まえ、修復後の建物に新たな生命の息吹を吹き込むことも政府の重要な役割だと考えています。

桃園市と日本の活発な経済関係と今後の展望

—近年、経済面での関係も益々深まっていますが、鄭市長は日本企業との間でどのような関係を構築していきたいと考えていますか。また、桃園市の成長戦略において、日本企業にはどのような役割を期待されていますか。

鄭市長 経済面における桃園市と日本企業との関係は歴史的に深く、これまでにトヨタ自動車、YKK、おやつカンパニーなど220を超える日本企業が桃園市に進出しています。最近でも、楽天グループが桃園市をホームタウンとするプロ野球チーム「楽天モンキーズ」を設立したほか、横浜八景島が水族館「Xpark」を開業するなど、日本企業と桃園市の協力は更なる発展の途上にあります。この点、桃園市の強みは、日本企業を力強く支える桃園市政府のサポート体制にあると思います。桃園市政府は日本企業が抱える悩みや考えを理解するために定期的な交流の場

を設けており、日本企業が困難に直面した際には市政府内の投資サービスセンターが直接問題の解決に協力する仕組みが確立しています。また、日本企業との関係では、2016年、YKK台湾社の取り組みを評価し、同社の吉田董事長に私から桃園市名誉市民証を授与させていただきました。

2018年の市長再任以降、私は桃園市の新たな成長戦略として「桃園三本の矢」という政策を打ち出しました。これはアベノミクスの「三本の矢」からヒントを得たものですが、具体的には桃園市の今後の発展の基礎となる「桃園航空城（桃園国際空港周辺の再開発計画）」、「アジア・シリコンバレー計画」及び「未来志向型インフラ整備計画」の三つの計画から構成される戦略です。この「桃園三本の矢」においても日本企業との協力を深めていきたいと考えています。まず、「桃園航空城」計画では、「クラウドコンピューティング」、「航空関連産業」、「国際物流」、「バイオテクノロジー」、「自動運転技術」及び「グリーンエネルギー」の六つの分野を主たる企業誘致の対象としています。これらはいずれも日本企業が大きな強みを持つ分野であることから、関連の日本企業には是非桃園市を海外進出の際の選択肢に加えて頂きたいです。

次に、「アジア・シリコンバレー計画」は、蔡英文政権が打ち出した「モノのインターネット（IoT）」によるイノベーションの活性化を目指す一大国家プロジェクトですが、同計画では桃園市が推進拠点の役割を担っています。現在、ビッグデータ、人工知能などの分野で企業誘致を行っており、是非日本企業とも協力していきたいと考えています。これに関連して、私は共通の価値観を持つ日台間の新たな協力として、5G分野での協力も進めていければと考えています。

最後に、「未来志向型インフラ整備計画」に

においては、既に日本企業との間で様々な具体的協力が進んでいます。例えば、桃園市初のメトロ（MRT）である桃園空港メトロは、丸紅が鉄道システム、川崎重工業が車両製造、日立製作所が変電・給電システムをそれぞれ担い、2017年に開業したものです。この協力の過程において、日本のエンジニアとの間で多くの交流を行うことができたため、今後こうした協力の土台を活かして、インフラ分野での協力を拡大していきたいと考えています。



阪神電車×桃園メトロ連携記念ラッピング列車の運行
(2019年3月)

少子化対策の最前線を行く桃園

—鄭市長の下で進められた桃園市の少子化対策は、台湾のモデルケースとして高く評価されています。その具体的な取り組みについて教えてください。

鄭市長 桃園市の少子化対策は、「桃園の奇跡」と呼ばれ、台湾における成功例と見なされています。実際、桃園市の出生率は台湾の直轄市の中で最も高く、平均年齢は直轄市の中で最も低い約39歳です。また、人口増加率でも他都市を圧倒しており、私が市長に就任する前に205万人であった人口は、7年で227万へと20万人以上の急成長を記録しました。

市長就任後、私が少子化対策として講じてき

た具体的な措置は、主に以下の五つの施策です。第一に、出産手当の充実。若い世代の経済的負担を軽減するため、国の支給とは別に、一人の出産につき3万元（約12万円）の支給を行っています。第二に、育児手当の充実。6歳以下の育児について、預け先（ベビーシッター、保育園など）に関係なく育児手当を支給し、育児にかかる家計の負担を可能な限り少なくしています。第三に、若い家庭を支えるための措置。例えば、妊婦の定期検査や不妊症治療に対し補助を行うとともに、公立幼稚園を積極的に建設し（7年間で96の幼稚園を新たに建設）、桃園市の幼稚園全体に占める公立の比率を約四割にまで引き上げました。第四に、親子の活動の場の創設。単なる公園であった場所を親子公園に変えるとともに、市立図書館に親子閲覧室や子ども劇場を設けるなど、子ども連れの家庭が楽しめる場所を増やしました。第五に、時代のニーズに応じた学校の創設。具体的には、一般市民の間でバイリンガル小学校の需要が非常に高いことから、公立のバイリンガル小学校を多数増設しました。このほか、若者が桃園市で働きたくなるよう、雇用支援措置や住宅支援などの面で様々な施策を講じてきました。

新たな政治環境を構築

—鄭市長は、既存の政党の枠組みを超えて、多数の市民から支持を集めていますが、これを実現できた鍵はどこにあったと考えますか。

鄭市長 私が桃園市長に初当選した2014年の選挙は、台湾政治における「奇跡」と言われています。桃園市は、2008年の総統選挙で国民党候補が民進党候補に約30万票の差をつけるなど、元来国民党の牙城と言われてきました。そのような中で、世襲も有力なバックグラウンドもない私が、世襲三代目の国民党現職に勝利したことで、「奇跡」と呼ばれるようになったの

です。そうした政治対立の中で市政を開始したため、私はこれまで伝統的に存在していた南北対立やエスニシティ対立を乗り越え、全市民が共有する市民意識の醸成に取り組んできました。具体的には、市長として市民との直接的な対話を重視するとともに、利益誘導や圧力政治を排除し、全市民が共に変化を実感できる新たな都市建設の実現に尽力してきました。こうした政策は桃園市民に高く評価して頂き、各メディアが行う過去7年の満足度調査において、一貫して7割以上の市民の支持を得ることが出来ました。現在、台湾政治にとって重要なことは、皆が理解できる共通の言語を模索し、政治的な対立を緩和していくことです。この点、民主化以降の30年を通じ、台湾アイデンティティは既に台湾社会の基盤となっていることから、この台湾アイデンティティを通じて、政治的な立場の差を縮めていくことが重要だと考えます。同時に、各種の問題の解決に当たっては、対立的手法ではなく、民主的手法を堅持することが肝要です。これを実践するのは容易ではありませんが、政治家として貫くべき原則だと考えています。

最後に

鄭市長 私が市長時代を通じて推進した都市外交の成果として、桃園市民にとって日本との交流はもはや当たり前ものとなりました。市民の



取材中の1コマ

対日意識がこれほどまでに高まった以上、今後誰が桃園市長に就任しても、桃園市の対日友好の基調が変わることはあり得ないと思います。また、私自身としては、来年の市長の任期満了後も、私自身の基金会を通じて、引き続き日本との交流を後押ししていきたいと考えています。台湾にとって日本の重要性は増す一方であり、同様に日本における台湾に対する認識の変化は、最近の日本の政治家の発言から感じ取ることができます。台湾の政治家は、今後より理性的かつ実務的なやり方で、台日関係を発展させていく必要があると考えます。勿論、その過程において、台日関係を破壊しようとする勢力による妨害があるかも知れませんが、そうした考えは決して台湾社会の主流にはなり得ないのです。

(写真：桃園市政府提供)